太田覺眠（おおたかくみん）　僧侶。慶應二年九月十六日伊勢國三重郡四日市生れ、昭和十九年十一月二十日歿（一八六六―一九四四）。初名一（はじめ）。少時佛教學、漢學を學ぶ。東京外國語學校ロシア語別科卒。明治二十四年生家法泉寺住職。二十六年眞宗本願寺開教使としてウラジオストクに駐在。日露戰爭勃發後も從軍布教を出願して奉天會戰に參加、奥地の在留民慰問に赴くも強制送還となった。講和後、開教使主任として再びウラジオストクに渡り、布教場を再興。また日本のシベリア出兵に當っては、各地を巡って宣撫工作に奔走した。のち内蒙古に入り、莫力廟集寧寺で死去。

著書に『得度小言』（明治二十六年十一月二十三日三重・自刊）、『露西亞物語』（大正十四年十二月二十日内外出版社）、『レーニングラード念佛日記』（昭和十年一月七日大阪・大乘社）等の他、太田宏宣編『覺眠慰勞會』（昭和十五年十二月二十五日三重・法泉寺）がある。